卵かけご飯の愛顔

矢代 稔［神奈川県］

ひとつ屋根の下で暮らした数年の間に、祖母は幼い私に多くのことを教えてくれた。井戸の水汲み、薪割り、かまど焚き、うどんの打ち方、野菜の世話。圧巻は鶏肉の処理で、祖母は鶏舎の鶏を絞め、毛をむしり、肉を切り分けるところまでを私に手伝わせ、生き物の命を頂く厳粛さと感謝の心を教えてくれた。

当時、私にとって一番のごちそうは、「卵かけご飯」だった。かまどの薪で炊いた熱あつのご飯。生みたての卵に生醤油のこうばしい匂い。そんな卵かけご飯が旨くないはずがない。私はかまどの周りをうろうろし、「はやく食べよう」と催促ばかりしていた。

茶碗めしを夢中でかっこむ私を、祖母はいつも慈しみ深い愛顔で見守っていた。でも祖母自身は、卵かけご飯に箸をつけようとしなかった。それは太平洋戦争末期、卵をおかずにご飯を食べている時、出征していた実の息子の戦死の知らせが届いたからだった。

「いつになったら食べるの」と問う私に、「お前が立派なお父さんになったらかね」と笑う祖母の瞼の奥では、戦死した子と成長した未来の私の姿が重なっていたのかもしれない。

祖母が亡くなって二十年。中三だった私の長女が摂食障害になり、医師に命まで危ない状態だと言われた。私は仕事を休職し、村の家に娘をつれて帰り、井戸水を汲み、野菜を育て、魚を釣り、薪を割ってご飯を炊くという、祖母に教わったとおりの暮らしをはじめた。食事の有難さ、大切さを、何とかして娘にも分かってもらいたかった。秋の虫の音が聞こえはじめる頃、娘はとうとう、あの卵かけご飯に「おいしい」と舌つづみをうち、愛顔を見せてくれた。祖母に命を助けられた。「おばあちゃん。私もいい父親になれたでしょうか？　そろそろ食べて頂けませんか」

次の月命日、いつものように仏壇に卵かけご飯を供えると、写真の中の祖母が、幼い私を見守っていた時と同じような愛顔で、かすかに微笑んでくれた。